

ローリング・エン・ローリング

抹茶ぼうろ

「潔癖症なの？」

付き合い始めて間もないころ、彼にそう尋ねたことがあった。少しのぎこちなさと、たくさんの希望とが混在した彼の八畳の部屋には、日曜日の午前中特有の静かな光が差し込んでいて、まだシーツにくるまっていた私は、もうとつくの昔に起きていたらしい彼の背中をぼんやりと眺めながら、気怠い頭を少しだけ上げた。

「あ、ごめん。起こしちゃった？」

振り向いた彼は申し訳なそうに、へらつと苦笑いした。ううん、全然、そう言つて上体をむくりと起こす。シーツが擦れる音とベッドが軋む音とが重なって、微かに部屋に響いた。

「ていうかどうして、起きていきなりそんなこと聞くの？」

「だって、よくコロコロしてる」

彼の右手に握られたローラー状のものの正式名称を

その時の私は知らなかったけれど、それをカーペットの上で転がす行為は「コロコロする」ことであるということに相違うことはきつとなくて、でもどうしてコロコロ、って言うんだらう、ゴロゴロとか、クルクルとかじゃダメだったのかな、いや、でもやっぱりコロコロがしつくりくるな、そもそもいったい誰がコロコロって呼び始めたんだらう、なんてついでに頭に浮かんできたどうでもいい疑問は、取りあえず放置しておくことにした。

「ああ、そういうことか。コロコロするのは俺の趣味なんだ。別に潔癖症とかじゃないよ」

笑いながら彼はそう言つて、また茶色のカーペットをコロコロし始めた。

「ふうん、そっかあ」

気の抜けたような声で返事をし、それ以上は何も聞かなかった。

後から思うと、コロコロが趣味ってどういうことだよ、という感じではあるのだけれど、その時の私は寝起きで頭がボーっとしてあまり深く考えなかったし、強いて言うなら、じゃあ典型的なO型である私の大雑把さな

んかも、彼は受け入れてくれるのだろうか、よかった潔癖症なんかじゃなくて、安心安心、くらいのことは思ったかもしれないけれど、とにかく会話はそこで終結した。私は小さく欠伸をしてもそもそもシートから抜け出し、彼はまた私に背を向けてカーペットをコロコロするのだった。

※※※※※

どこにでもあるような恋だった。

だけど世界でたった一つの、かけがえのない恋だと思っていた。

恋は盲目とはよく言ったものだ。あのころの私は、「恋をしていること」に酔いしれるばかりで、肝心なことはまるつきり無視しながら、毎日彼と手をつなぎながら歩いて、隣で横になって笑った。

彼の、右巻きをつむじから少しだけ飛び出した寝癖だとか、笑った時にちらりと見える八重歯だとか、そんな些細な一つ一つのこと、愛しくてしょうがなかった。

「好き？」と言ったら必ず「うん、好き」と答えてくれるような、そんな陳腐なドラマみたいな恋がずっと続いていくのだろうか、多分本気で思っていた。

人差し指でそっと押すだけで簡単に崩れてしまいそうなほど脆い土台の上で、私はきつと夢を見ていたのだ。甘い夢を、甘すぎた夢を。

※※※※※

調べてみたところ、カーペットをコロコロするあれの正式名称は、「粘着クリーナー」らしい。ああ、なるほどな、と思ったけれど、なんだかいやに仰々しい名前のような気はした。

まず「粘着」という響きがよくない。粘着、ねんちゃく、ネンチャク。ねとってした、いやらしい感じ。「クリーナー」という言葉も、あのコンパクトでささやかなフォルムには合わない。あれはそんな大それたものじゃない。

コロコロはやっぱりコロコロで、私の中ではそれ以外

の何物でもなくて、もちろん粘着クリーナーという名称を全否定するわけじゃ決してないけれど、実際に「おい、その粘着クリーナー取って」「はい、粘着クリーナーよ」「ありがとう」なんて会話がこの世界のどこかでも繰り返られているかもしれないわけだけれど、それでも私の中でコロコロはやっぱりコロコロでしかないから、どんなに正式名称を知ったところでこれからも私はあれのことをコロコロと呼び続けるのだろう、きっとそうだろう。

そんなことを彼に話したら、そうだね、の一言で片づけられてしまった。

「最近、なんか忙しそうだね」

「うん、ゼミの論文発表が近くてさ。今日も、もう少ししたら大学戻って資料収集しなくちゃ」

「そっか」

眩くように発した言葉は、すぐに部屋の静けさと同化して消えた。

ベッドに二人で横になっている時間が、私は好きだった。そしてさらに言うなら、向かい合って顔を合わせる

よりは、二人とも仰向けになった態勢でいるほうがもっと好きだった。

私は右手を、彼は左手を、お互いの指に絡ませて、無言で天井を見つめる。そうしたら、なんだか世界の中に私たち二人しかいないようなそんな気分になった。彼の八畳の部屋は、果てしなく広い私たちだけの世界へと早変わりした。

宇宙の片隅にぽっかりと空いた、白くて明るい、私たちだけの空間。

そんな妄想も、外から聞こえる車の音だとか、遅めの時間に設定してあった目覚ましのアラームだとか、そういったもので大抵は消されてしまうのだけれど。

寝息が聞こえたから、彼は眠ってしまったのだろう。大学に戻らなきやと言っていたので、もう少ししたら起こしてあげようと思う。

また仰向けになって天井を見つめた。出来立ての絹豆腐よりも、新鮮な牛乳よりも、白いなと思った。

※※※※※

彼は今日も茶色のカーペットをコロコロする。もうほとんど埃も髪の毛も取れているはずなのに、それでも何かを忘れようとするみたいに、コロコロする。

真っ白なシートはどんなにコロコロしても真っ白のままだ。

「ねえ」

私が声を掛けると、何？ とぶつきらぼうな返事が返ってきた。

「院行くのやめるって、本当？」

彼の右手の動きがようやく止まった。

「……どこで聞いたの、その話」

「森瀬君たちが、研究室で話してた」

ああ、あいつらか……とため息交じりに呟いて、彼は私のほうを振り返った。

「本当だよ」

「どうして、私には教えてくれなかったの」

「言ったら多分止めるでしょ」

「うん、だって一緒に院に行くって言った」

「止めてほしくなかったんだよね」

「そっか」

「それに、ミサには別に関係ないかなと思って」

「そっか」

なんで行かないのとか、これからどうするつもりなのとか、

どうして私には関係ないの、とか。

吐き出したい言葉は山ほどあったけれど、その全てが喉の奥に重く溜まっていった。最近彼と話していると、私はたまにそうなる。何も言えなくなつて、苦しくなつて、どこからか、黒い塊みたいなのが押し寄せてくる気がする。

ふいに、なんでもいいから壊したい衝動に駆られた。

可愛いフランス人形や、甘ったるいイチゴのショートケーキ、キラキラしたおもちゃのネックレス、水色のビー玉に、ちっちゃなシロツメクサの冠。そんな可愛らしいものをぐちゃぐちゃにして、全部床にたたきつけてしまいたい。

ポツリと、彼が口を開いた。

「それでさ」

「うん」

「前から思ってたから、この際言うんだけど」

「うん」

「俺もそろそろ潮時だと思っただよね」

「良い頃合い？」

「多分そんな感じ」

「うん」

「別れようか」

「別れる」

何となく彼の言葉を反復した。別れる。正直なところ予感はしていた。けれど、実際に面と向かって言われると、想像に反して軽い響き。別れる。わかれる、ワカレル。そんな名前の国が南アメリカとかにあった気がする。あくまで気がするだけだ。地理には弱い。

私はただ彼の言葉を反復しただけのつもりだったけれど、彼のほうは私が別れを同意したと思ったらしく、少し傷ついたような、でも安堵したような表情を浮かべ

た。

「荷物は今度まとめて送るからさ」

「うん」

「ミサの部屋においてある俺の荷物は適当に処分して

おいていいから」

「分かった」

「あ、鍵だけは返してほしいかも」

「了解」

「今までありがとうね」

「うん」

「いろいろ落ち着いたところに、気が向いたら連絡するよ」

「分かった」

彼が重苦しくつなぐ言葉を、まるで薄めに作ったカルピスみたいに私はさらりと処理していった。そっか、うん、わかった。もし相手の言葉の間に絶妙なタイミングで相槌を入れるゲームなんてものがあつたら、今の私は割と上位の成績を狙えるかもしれない。

会話が終わると彼は私に背を向けて、またカーペットをコロコロし始めた。

一つの恋の終わりはこんなにも呆気ないものなのだ。映画や小説で見ると、劇的な贗作なんかじゃなくて、まるで砂に描いた落書きを波がさらっていくみたいに、いとも簡単に、消えて無くなってしまふ。

さらわれた落書きを描いた子供は泣いて悲しむだろうか。それともすぐに忘れて、今度は波打ち際から少し離れたところで別の遊びを始めるのだろうか。

代わりに作られた砂のお城を蹴り飛ばして、ただの砂に戻してしまいたい。儂さと残酷さはいつだって背中合わせだ。

部屋の隅から隅を、ゆつくりと念入りに、彼はコロコロする。そして私はその様子を、部屋の入り口に突っ立つて、あほみたいにぼかんと眺めている。私が見ている彼は何も言わない。

まるで私なんてこの部屋の中にいないみたいだ。彼がカーペットをコロコロする姿を見るのは昔から割と好きだった。ぺたんこ正座して、背中を一定のリズムで動かす姿は、なんとなく猫を連想させた。まあ、彼はどちらかと言うと犬っぽい性格の持ち主だったけれど、

ど。

部屋を出る前に何か言おうと思った。今までありがとう、好きだったよ、さよならは言わないね。そんなありきたりな文字の羅列なんかじゃない、別れのセリフを言おうと思った。自分でも困惑するくらい冷静で、次々と言葉は思い浮かぶのだけれど、どれもしっくりこなかった。浮かぶのはどれも私が本当に思っていることじゃない、偽物の言葉ばかりだ。

まるで私たちの関係みたいに不安定で、それでいて凶々しい言葉たち。

コロコロ、コロコロ。彼がコロコロをコロコロする音だけが部屋に響く。

気付くと、言葉を発していた。

「ユウ君はさ、悩んでる時とか、嫌なことがあった時とかに、いつもコロコロするよね」

ふっと、彼は振り返る。何か言いたそうな顔をしていたけれど、それを無視して、言葉は紡がれていく。

「お父さんと喧嘩したって言ってた時も、レポートを教授にダメ出しされたーってやさぐれて帰ってきた日も、

私と喧嘩した夜だって、ユウ君はずっとコロコロしてたよ」

私と初めて寝た次の日の朝も、とは言わないでおくことにする。

最後まで傷つくことを恐れた私の汚い臆病さゆえに、だ。

多分私はずっと気付いていたのだ。彼は、私のことを別に愛してなどいなかったということに。

彼は少し寂しそうに笑って言った。

「コロコロするのは、俺の趣味だよ」

彼の最後の優しさは、私の心を少しだけ揺らした。少しだけ。生まれて間もない赤ちゃんを揺らす、真つ白の揺りかごのような繊細さで、静かに。

「そっか」

私は彼の部屋を後にすることにする。一度も振り返りなかつたけれど、彼はまた猫みたいにカーペットをコロコロし始めるのだろう。何度やっても真つ白なままのシートを見て、時々ため息なんてつきながら。それでも自分の中にあるしがらみとか、息苦しさとか、そういうも

のまでも取り去ってしまおうとするみたいに、彼はいつまでもコロコロする。

その様を想像しながら私は歩みを進めた。外はもうすっかり暗くなっていて、トレーナー一枚とGパンの私には少し肌寒かった。東の空にはもう満月が我が物顔で居座っていた。少しだけぼやけて見えるけど、気のせいだということにしておく。

帰る途中で、ホームセンターに寄ろう。うちにあったコロコロは、確かもうすぐシートがなくなりそうだったから。家に帰ったら、カーペットに張り付いた埃や髪の毛をとろう。

ぺたんと正座しながら、コロコロ、コロコロ。少し足が痺れてきたら、また体勢を変えてコロコロ。猫みたい、コロコロ、コロコロ。

たった七畳しかない小さな空間を、ただひたすらにコロコロしよう。

すべての埃や髪の毛を取り終えてコロコロしたシートが真つ白になるころに、私は一体何を思うのだろうか。

終

月刊缶じうす五月号 通巻198号
2014年5月4日発行

編集人 抹茶ぼうろ 黒兎

印刷所 広島大学 分団BOX